

長野部室

# 個人山行報告

黒  
品

部  
室

—上廊下—

1971  
10/2 ~ 10/8

信州大学山岳会  
伊那松本山岳部

## はじめに

我々はなぜ報告書を作るのである?  
確かに、山行といふものは、計画で始まり、  
報告で終わると教えられてきた。そして、  
自分も、そう思う。後から、来る者のために、  
知らぬ者のために、317. 自分達の整理の  
ために、記録は、残さなければならぬ。  
それは、一種の主張であるかもしれない。  
他人に対する呼びかけであるかもしれない。  
しかし、決して、自己満足であってはならない。  
自分達は、ここに、自分達の青春の踏跡を  
しるうつもりだ。せつたよく、けだるい青春の  
一頁を。果してそんなものが、部の目的や  
又は、アルゼニズムと、どんな関係にあるのか。  
自分は、知らない。以下の拙文を読んで  
いただき、何らかの批評を持っていただければ、幸である。

1971. 10. 17

大安

- 場所：黒部上ノ廊下。
- 期間：1971. 10/2 ~ 10/8
- メンバー：  
大安徹雄  
渡部光則。

## — 黒部上ノ廊下逆行概要 —

新人の夏山の時、高天ヶ原で、下方に見える白い岩壁と青い流れを指さして、「寺沢さんと佐藤が引き帰したのは、この辺かな。」と笠原さんが語られた。それが上ノ廊下だったのだ。当時の自分がまだ山の名前、さら、知らないかったし、そんなものは、全く知らないかった。オレ、バテバテで、それ所では、なかった。

うの上ノ廊下も、その年(544、夏)の集中豪雨で、ずい分と変わったことが、後の「山と渓谷」のグラビアで報ぜられた。全く、昔のおもかげみでなくなってはいたとのことだった。そんな、上ノ廊下に黙って、どんな意義があるのだろうか。しかし、我々は、行ってみたかった。我々の目で、上ノ廊下を見たかった。そんな気持で、8月末に、今回の渡部君、317、長野の菊池、鶴松兩君の4人で、計画していたが、台風23号のため、中止せざるを得なかつた。そこで、再び、渡部君と計画したわけであった。試験などそのため、10月になつてしまひ、初雪のニュースも入り、困難が予想された。夏ならぬれても、がまんできるかも知れないが、10月では、がまんだけでは、きまないと思った。そんな不安があつたが、我々は、熱意で、突破しようとした。

一応、成功したと言つてよいと思うが、とにかく天候に恵まれていた。詳細は、記録の方に回すとして、ガイドブックとか、以前の記録に比べて、かなり容易になつたと思われる。東沢出合の荒涼さは、昭和45年の夏に見て、おどろいたが、そこより、下の黒ビンがまでも全く、広々と、荒れ放題であった。川原に水が、流れているだけだった。下ノ黒ビンが手前より、惜しくも、

2 Pich 高巣いつほつたのだが、もう少し、じっくり取組んでみたら、よかったと後悔している。廊下沢出合の荒れ方は、最も、ひどかった。廊下沢、少し手前の渡渉は、今回、最大のものであったし、廊下沢の出合には、土砂が、堆積し、大きなデルタを形成し、黒、部の流れをせきとめて、天然湖「黒、五」をつけていた。上、黒、ビンガ、いわゆる、中、廊下に入るとまるで、戸の底にいるまるで、两岸の、のぞきりたった垂壁は、ぬれて、黒、光りしており、陰惨なものだったが、所々に、堆積が、でまっていたりして、先人の苦労など、うそのように、快調に抜けられた。金作谷より上流のいわゆる奥の廊下は、若干、昔のなごりを残して、今はようで、完全に、ヘツリを強要させられた。このあたりよし、からじが、なくなり、かなり、苦労した。そこより、上流は、適当な、ヘツリと渡渉で、余裕をもって、動かした。とにかく、長い流れを辿るのぼって、その源に至るという行為は、感慨深いものである。幼きとき、故郷の小川で、水遊びを行っていた折、この川の上流には、何があるのかあと、一端の探検家気どりで、どんどん逆のぼつて行った時の気持ちと相通ずるもののが、あるような気がした。

## — 行動記録 —

10/2. ⑨ 時々 AM 7:19 松本登 — 10:30 黒四  
ダラ登 — 14:40 平 — 15:45 渡船 — 17:30  
東沢出合

朝、1台の汽車に乗るはずだったのに寝過ごす。  
急いでても、12:00 の渡船に間に合ひを失ない

ので、ダラサトで、コーヒーなどを飲んで、そのままに  
ちらちら、視線を送ります。土曜日ということで、  
霧雨の中、多く観光客で、にぎわっています。彼等の  
喜々とした様子に比べ、我々は、これから先への不安、  
期待で、緊張していました。湖岸の道を落葉をかきこむ  
いわせながら、のんびり歩く。親切なことに、「くろよん丸」  
の船長は、時間外に、我々、2人だけのために、船を  
出してくれた。船長の「上1廊下は、時期はずれさせ、  
そんな、大きなザックでは、えらいじ」という言葉を若干、  
の不安な気持ち受け取り、東沢出合へと急ぐ。

(大字)

10/3 ○ AM 8:30 東沢出合 C.S.発 — 13:00 下黒部川  
入口

快晴で明けた。出たしはいいぞ。意気高くとウラジ  
を水にいたし。パンパンと岩にたたいた後、キリッとして  
出発。最初に東沢を渡らんことには、黒部の本流には、  
入れない。ウニウロしながら、ゆるやかな流れの処を  
さがして、思い切って、水に入る。何と冷たいことよ。  
それでも、いいよ黒部川に入ったんだ。何回となく、  
渡渉をくり返すのだが、水量が、多くて、即ぐには、  
流れに入る気がしない。どこか、このまま、連れ子ルート  
は、ないものかと探すのだが、結局、渡るのが、一番、  
早いことで、納得させられる。ザルは、つける、と  
水量が、多く、上に、流れも急で、危険なようだ。こいら  
辺は、入り口だから瀬で、まだ川巾も、うんと広く、水に入  
っていい時間もそれだけ長いし、あまりの冷たさで足の  
感覚が、なくなくなる。山は、もうあわただしい、冬の  
装いを始めている。そんなくり返しの中で、時々、後を  
振り返るのは、進んだ距離を確かめ、安心の気持

他に、前途の困難さに絶望に近い気持を感じるのも、また否定出来なかった。渡渉の際、一々ザックをおりし、ザイルを掛け、アンガイレンし、終ると又、ザイルをほり、そんな一連の動作が、実に貴重な時間を奪っていく様に感じ、その行為の面倒くささと共に「果して、こんなことで、予定通り行けるのか」と、いろいろが、生じてくるのだった。(かし、とにかく進む)。まだ、谷に入つて一日目なのだ。両側の山も深くなつた。V字谷の底から、仰ぐ、壁は、限られたものだが、今日のそれは、蒼い。そして、我々は、ついに、これ以上、進めない地点に来た。そこからは、深い廊下が、始まつた。どうやら、下ノ黒ビニルの始まりらしい。右岸の壁伝いに、行こうとするのだが、水深が、胸までまたぬで、引き返した。そこからは、深い淵で、どうしようもないし、壁は、かがついて、手が、つけられない。我々は、人工登はんをやりに、上ノ廊下に来たのではあり、もう1回試みたが、やめられた。もし、今度は、左岸に渡されれば、何とかなるかも知れない」とザイルをつけて渡歩を試みるも、無残にも、水流に押し流され、ズブぬれて戻つて来た。大安さんが軽油に今一度、試みても、又、ズブぬれの結果だった。もう、1時だ。胴ぶるいが、きて、寒くて、水に入ると気が何と17も、あさなくなつた。「今日は、これまでだ」決まりと、早速、薪木を集め、火を、何と暖かいんだろ。取れたものをどうぞと乾かす。足跡を張り終えて、一息つくと明日からのこと、今日のことで、気が滅入つてくる。前途多難……意氣消沈。(ナベ)

10/4 ② or ① AM 8:45 C.S.発 — 9:25 高天ヶ原新道  
10:50 口元1例沢 — 11:25 再び黒部の流れへ — 12:50  
口下沢出合 — 14:30 「黒玉」高巻終了 — 15:00 スゴ沢出合  
左岸への渡渉をあきらめ、左岸の小滝の達致した小川に沿<sup>C.S.</sup>を高天ヶ原新道へ逃げる。約30分で、高天ヶ原新道へ出る。このまま、滝りにを捲しながら、新道を進む。木々の間から、見える黒部の流れは、函舟が、廊下をなし、青々と流れていった。

「黒玉」を越えようか、手前で本流に戾子が迷ったが、「黒玉」の砂丘(?)が、前方に見えていた所で、本流の河原がすぐ下に見えたので降りる。別に苦労するところなく、再び、黒部に接した。「黒玉」手前で左岸へこれすて、最高の半ば泳いで渡渉を行う。以下下流出合から、「黒玉」までは、広大な砂丘である。「黒玉」は、深い青みをたたえたかなり大きく、無氣味な天然湖である。黒四を作るので、あれだけ苦労した人間に比べ、わざか、数日で、これを造り上げた自然の偉大さには、頭が下る、ありにくく、竹竿、うしきものを見あたらなかつたので、左岸のブッシュをトラバース氣味に高まく。所々に、踏跡らしきものあり。スゴ派は、出合から、ちょと入った所に、滝があり、もう簡単な Escape に使えるもるい。右岸に渡って、それを張る。紅葉と、薬師の稜線の初雪で、自くなつた岩肌が、美しい。

(大谷)

10/5 ⑩ 沈。

雨は、降り続いている。昨日在った中洲が、濁流に消えていた。信じられない位の増水だ。大きな岩が、ゴロゴロ音をたてて流れていく。シャラフリ、ぬれて砂とてぐしゃぐしゃ。何とも、1がたい、こんな大きな川の真只中では、我々には、一体、何が出来よう。じつと待つばかりだ。雨は、休まずない。一体、どうしたついいんだ。10月3日下ノ黒、ビンガを前にして、全く、意氣消沈した時もさうだった。今日も、

我々は、自然の為すことに、全く手を出せず、じつと待つ。今までの山行は、全く、こちらが、何とか、がんばれば、何とかなつたものだった。それが、黒部としたら、全く、我々の意志や行為と別個の、存在として生きている。あまりの大好きな自然、というのを見せつけられて、考えこんでしまった。崖と頸から、気がついたのだが、数10m先の屈曲部の岩に流れが、ぶち当つて、ろくに止まが

Zeltの入口から見える。Zeltの位置を移す必要が感ぜられ、何度も心配になつて、様子を偵察に行つたり、舟内に遭遇した雨も上がり、これまでの増水は、心配にならずようになつて、ほつとした。雨の中、深く、急な右岸の樹林を逃げ子のも難しく思われていたし、我々は、ついていた。

(ナベ)

10/6 ① AM 8:35 C.S. 巻 — 上1黒、ビンガ —

11:05 金作谷出合 — 13:40 奥ノダル浜出合

昨日の心配をよそに、何とか、左岸へ渡ることができた。

少し、行って、また右岸に渡りたる所、いよいよ、核心部、

上1黒、ビンガに入る。両側は、真黒、カツルツルした大岩壁で、陽も当たらず、陰惨だ。井戸の底から、上を見上げた感じに、青空が、見えた。所々、水が、滝となつて落ち落ちている。高巻くことなど、とてもできない。浅では、所を捜しては、渡り、舟まで、水につかって、岩をつかまねながら、ハツる。渡部君が、へつりに失敗17、ザックを水面に浮かべ、完全につかる。渡部君には、毎の毒だつたが、この有様といったら、ますで亀だ。所々にハーベンも見え、水につかっては、岩棚に出、ますで、カエルの手にかかるから、上1黒、ビンガを抜けた。金作谷は、出合まで、雪渓があり、大きな谷である。上部で、2つに分かれ17つある。一度、行ってみると、おもしろうだ。金作谷より奥ノダル浜までは、ようやく、黒部の様相を呈し、右岸のちよといた岩壁をよじながら、進む。今日も、さみがに疲れた。腰以上の渡渉をするところ15回。冷たい所では、ない。心臓まで、つかると、一瞬、止まつたような気がする。オチンパンは、完全にならびてしまった。インボにならぶのでは?

(大谷)

10/7 ① AM 7:40 C.S. 登 — 8:40 立石  
— 11:05 薬師沢出合 — 12:35 鬼平 —  
13:55 祖父平。

ここ、奥ノ沢出合から、薬師沢出合の間は、奥ノ廊下と称するが、もう黒部の荒々しさはない。水量も減った。立石なんて奇岩が途中あつけれど、どことなく、景色はかたやかだ。渡渉もたまには、あつけれど、昨日までの様に1日に最低十数度は、やるなげでこともなさうだ。大体、右岸通しに進む。薬師の東南轍に面をうる沢が、3本程、突き上げている。もう景色たって、ゆっくりながめられ心地になった。黒部の深い谷間の景色は、一つ一つ特色を持ち、美しく、又、壯麗なめったに見られぬものだつたに違ひないが、とにかく、昨日までは、前進すなどだけて、精一杯で、それを味わうまでの心の余裕はなかつた。イワナだつてどうだ。俺達をまるで無視して、のみたつに水面に100mかと遙い下にはじくにさわゆ奴を何度も見たけれど、つづけやうにならず、余裕は、まるで、なかつたのだから。川が、大きく屈曲するあたりから、踏跡が出てきて、30mから、2回程、渡渉をして、直前に、薬師沢出合についた。出来たら、出合の小舎で、タバコをわけてもらおうと期待したのだが、留守の様だった。この出合から上は、本当に、パラダイスだと感えた。小さくても、青く澄んだトロが、続き、赤くみがかれた小滝が、それにかかるついた。そして、両岸には、处处、かわいい湿原が在るのだった。鬼平のあまりの静けさと美しさに、317今まで、味わうことの出来なかつたかだやかな歩き(→さうだ、黒部は、沢に変わつて)に、今まで、張りつめていた気持ちが、ゆるむのを感じた。鬼平から先は、平凡な河原を、飛石伝いに、又、沢をまた踏跡を利用しながら、進み、たいくつにわたり、祖父平に着いた。

眼前に黒部五郎のカーレが、大きく立派だ。後方は深い  
針葉樹の林が、かたやかな雲、1年ハ。大安さんが、  
「ここが俺だけの土地やつたらなあ」という。何からしら、  
俺達山に登る連中には、独立欲が強いみたいだし。  
そして隠し残りかきたい気持ちが、作用するものらしい。  
まして、こんな死ぬ気だったら、なあさら、強くこう願う。草原の一  
番、快適なる處に、足跡を張る。今夜は、黒部最後  
の夜だし、Essent整理17、あらかた食べることにいた。  
明日は、いよいよ後線だ。 (ナベ)

10/8. ○ AM 8:15 C.S.発、— 10:10 黒部源頭 —  
10:35 岩苔乗越 — 11:20 ワシバ岳 —  
11:55 伊藤新道分歧点 — 15:55 湯俣 —  
16:00 湯 — 18:50 トラック便東 — 19:50 大町  
— 21:30 松本

朝、我々は、見た。霞のまゝの世界を。草原には、うっすら  
と霜が降り、源頭に登ったのは“か”的朝陽が、キラキラと  
どくんな宝石よりも、高貴な輝きを放っていた。  
それを歩かせてみたかった。純白のまゝの長いドレスを  
身とい、つばの大きな長い帽子をかぶり、野の花を  
而今は抱いた女を。そんな想いをよそに、我々は、  
源頭へと急いで。昨年、同様、水にぬれた岩に丸く、  
水が、ついていた。後線は、自力だった。地下足袋の冷たさ  
も忘れ、ワシバの頂で、この一週間の様なことが胸を  
去って行った。冷たがった水のことも、おつかなかつてへつりの  
ことも忘れて、今は、唯、懐いだけだった。伊藤新道の  
長い道をぶつぶつ言しながら、歩き、湯に着いた時は、  
日も暮れていた。飯場の灯が、タバコの匂いが我々  
を、人の世界へと案内してくれた。もう遠いとあきらめかけ  
ていた、トラックに抬かれ、3日間、禁煙をせざるを得なかつた。

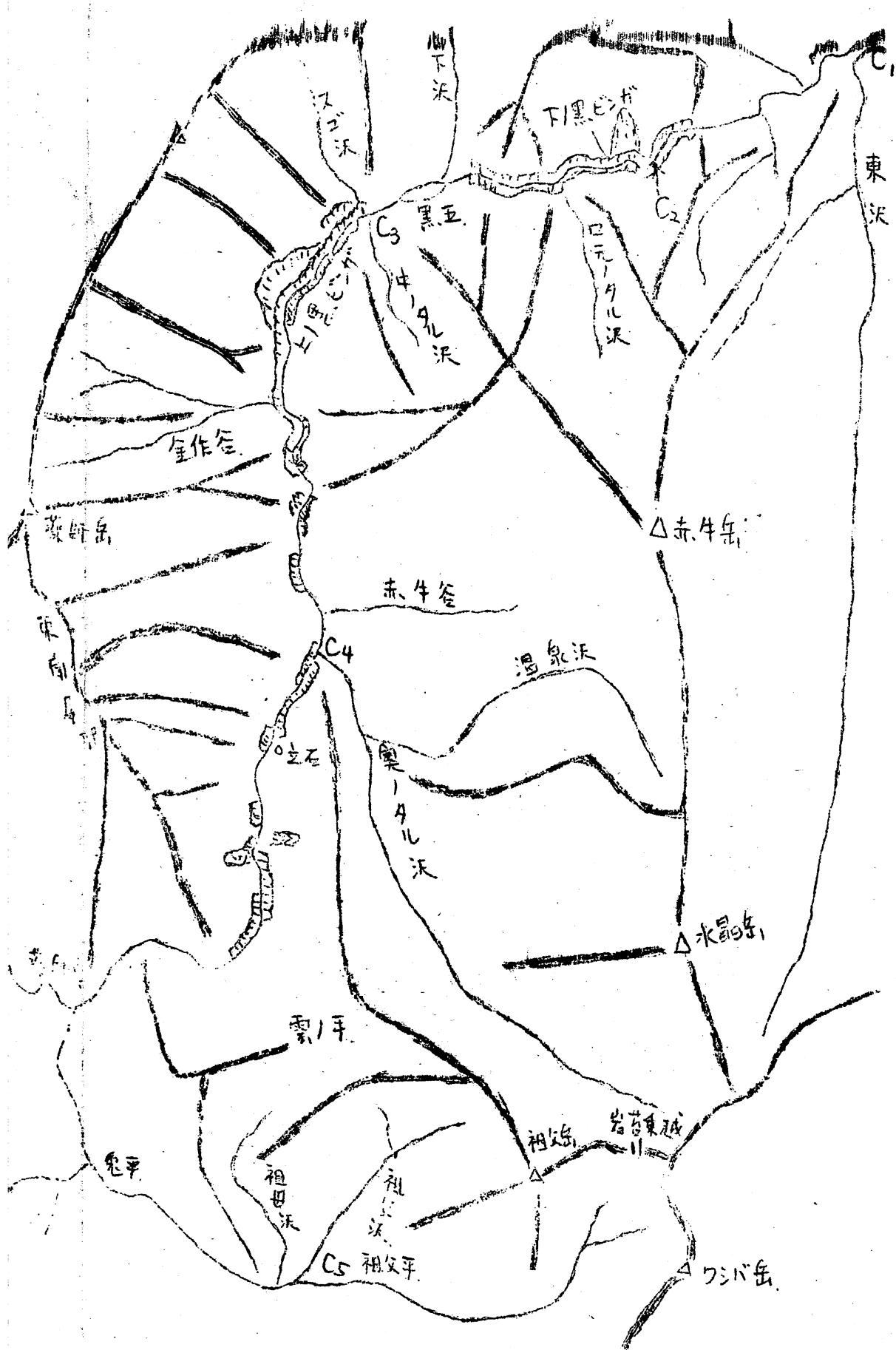
我々に、「安い煙草だけ……」と土産出された Echo の  
味は、この世の何にもまして美味ではなかった。さうが、  
大町の街の灯が、ネオンが、我々を迎えてくれた時、  
張りつけていたものが、一度に抜けていくのが感ぜられた。  
(大安)。

### 秋の黒部川逆行

今年の新しい雪を踏んで、岩苔乗越から、せっせと登り続  
けすこと、1ヶ月、我々、二人は、目標の鷲羽岳に立った。  
黒部の川音を枕に聞くこと、六晩七日目の朝、源流  
祖父平を立って、やっと踏んだ頂だった。今朝、登って来た  
黒部源流に、初冬のやわらかい陽が、さすいのを  
ぼくやりながらめり、317、槍の北鎌を、穂高の連峰を  
見る。北鎌は、猶、標、あたりから、上は、もう真、白だし、  
穂高の飛騨側の完全に冬の姿に、何からかおいく  
なみのだった。そんな頂での一通りの感概をもと、  
今度は、必死になつて、夏、登山者のすべてにわたるタバコ  
の吸いがらを探さねばならなかつた。数えてみれば、俺達は、5日  
以来、無理やりの禁煙生活だったのだから。渡渉中、  
立てなくとも、今回、数の少なかつたタバコをつい、うき  
めらう、バカな、ことすてはつたのが、實に悔やま  
れる。今時分まで、吸えヨタバコが、こんな處に  
ある誤が、ないや。仕方が、ないので、遡ってきた  
黒部を取りまく山でも、眺めることにす。

渡部光則

上ノ廊下概念図



## 上ノ廊下邇行 テーマソング

— 涙からあしたへ —

なぜ一人行くの

燃えるほほぬうて

歩きはじめよう さよならのむこうへ

なぜ すててきたの

きのうまでの思い出

歩きはじめよう 涙からあしたへ

誰か後から 叫ばとめ声が

胸を熱くするが ふりかえらない

なぜ一人行くの

燃えるほほぬうて

歩きはじめよう 涙からあしたへ

白人山行報告「黒部」

1972. 2. 19. 発行

ガリ+カ・印刷・大谷

発行所・SIMAC

50部限定

非売品